教育実践研究　第29集（2019）211－216

［生徒指導］

個に応じた支援による不登校解消への一考察

－外部機関との連携を生かした不登校支援－

村田　裕昭*

1　問題の所存

(1)　A児の実態から

新しい学校へ赴任して担任となった３年生の学級にA児がいた。家族構成は父，母，A児，弟妹の５人で，引継ぎでは，仲良しの児童２人と常にグループを作って他の児童と交流をしないため，３年生進級時の学級編成ではA児と仲良しの児童２人は別の学級にしたと聞いていた。４月当初A児は静かな様子で学校生活を送っていたが，４月中旬から母親に給食の量が多いと訴えるようになった。それから給食では，他の児童の三分の一程度の量しか食べなくなり，学校での様子が常に不安そうな表情をするようになっていった。両親と連絡を取り合い相談するが，「家では問題なく食事をしている。また授業や友達，教師についても特別不満なことはない。」とのことだった。A児本人との面談でも「授業や学級には特に心配はない。自分でも分からないけど給食になると不安になって食べることができなくなる。」とのことで，何が不安かは分からなかった。その後４月下旬からは登校を渋るようになり，５月からは全欠状態となった。「いじめ」や「学習不振」といった具体的な要因は全くなく，担任も家庭も突然の不登校に戸惑いを隠せなかった。不登校は，一見全く問題のない児童にも突然のように現れる。児童一人一人の心の中に自分自身でも気付かない不安が徐々に大きくなっていく。A児はそれから苛立ちが大きくなり，両親に暴言を言うようになっていった。その後医師の診断でA児はアスペルガー症候群であると診断された。

では突然不登校となったA児には，どのような支援をすべきなのだろうか。情緒が不安定なA児に登校を促しても効果はなさそうだった。また，不安の原因が本人にも，両親にも，担任にも分からない中でどうやって支援をしていくのかが課題となった。無理にA児の不安の原因を探れば，A児は担任に心を閉ざしてしまうかもしれない。さらに余計な不安が募るかもしれない。不登校児童への対応は，適切な支援を適切なタイミングで行わなければならない。

(2)　先行研究から

池島（2001）は不登校の子どもが再び登校できるように回復していく過程を８つの段階を通して説明している（図１）[1)]。池島（2001）によれば，各段階では，次のことが大切だと説いている。初期段階（１～２期）では，子どもの言葉を真剣に聞き，苦しみを受け止めること，中期段階（３～５期）では，登校刺激を与えず，専門機関の指導を受けながら児童へ対応していくこと，後期段階（６～８期）では，登校への問題について相談に応じながら，登校した時の受け入れ態勢を整えておくことである。A児の不登校の原因となった食欲減少が第１期，苛立ちと両親への暴言が第２，３期だとすると，A児の状態をよく表していると考えられる。従ってこの図１をもとにA児への対応を考えることが有効であると考えた。またA児の苛立ちは，担任も保護者も気づかない様々な要因が多々あることが予想される。A児の負担にならないようにA児の状態をみることができる，両親や担任以外の存在も重要だと予想される。そこで，本研究では「不登校の回復の過程」を通してA児への支援を行い，A児の変容から各段階での不登校児童への教師の行動と支援体制の在り方を考察する。また各段階での支援の際には，教育センター内の教育相談研究室や医療機関といった学校外部の機関と連携しながら，誰がどのようにA児と関わるべきかを考察していく。

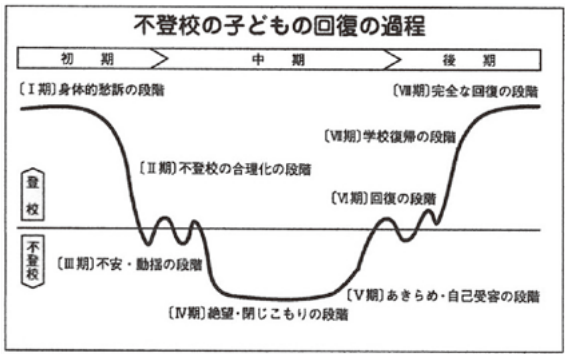

図１　不登校の子どもの回復の過程

*長岡市立桂小学校

2　研究の目的

Ａ児の状態を「不登校の回復の過程」から判断し，外部機関と連携しながら，不登校の解消を目指す中で，不登校児童への適切な教師の行動と支援体制の在り方を考察する。

3　研究の内容と方法

(1)　内容

本研究では，Ａ児の状態を「不登校の回復の過程」に当てはめＡ児に応じた支援を行う。そこで，取り組み方を次のように構想した。

①Ａ児の言動や保護者との情報交換を通してＡ児がどの段階にいるのかを判断する。

②保護者・外部機関との情報交換，校内での適応対策委員会を通して，保護者，担任の対応を決定する。

③支援を行いながら，状態や言動を考察し，保護者と相談しながら次の段階へつなげていく。

④教育センター内の教育相談研究室の相談員とＡ児やＡ児の保護者の情報を共有し，Ａ児への理解を深めていく。

(2)　検証方法

①年間の欠席日数や短時間登校の日数といった登校状況の変化から教師の行動と支援体制の在り方を考察する。

4　研究の実際

(1)　初期段階（１～２期）のＡ児の状態とＡ児への対応

①　Ａ児の状態「学校生活への不満と登校渋り」

Ａ児は，４月中旬から給食を食べる量が減り，学校でとても不安そうな表情をするようになった。そして，「気分が悪い」，「腹痛」といった理由で欠席することがあった。また担任や級外の職員が面談をしたり，保護者から話を聞いてもらったりすると「級友から理科の教科書の幼虫の写真を嫌がるのに見せられる。」や「仲が良かった級友とクラス替えで離れてしまった。」といった不満を言うようになった。徐々に不安が募り，朝登校を保護者が促すと反抗や暴言が出るようになり，徐々に欠席日数が増えていった。

②　Ａ児への対応「Ａ児の不安と向き合う」

Ａ児の不登校の理由として，体の不調から始まり，徐々に級友や学校への不満となっていった。ここではＡ児の言うことを親身に聞き，保護者と連絡を取り合い，学校や級友への不満を共有しながら支援を行った。話題に上がった級友から話を聞き，指導後Ａ児の心配を伝えたり，給食の量などＡ児の心配事を本人と相談したりした。またＡ児への理解が担任と保護者ともに深まるように教育センター内の教育相談研究室へ相談を進めた。初めは保護者のみが週１回面接に行っていたが，２週間ほどでＡ児も面接に行くようになった。Ａ児と相談員の面接から「Ａ児はとても洞察力があり，大人から言われる発言の裏に登校を促してくることを見抜いているのではないだろうか。そしてそんな子だからこそ，今まで学級の子ども達の中でとても気を遣ってきたのではないか」という情報を保護者と共有した。また保護者と相談員の面接から「今までの学校生活で失ったエネルギーを取り戻すために，家庭の中では穏やかに生活させてあげてはどうか。」と提案を受けた。これらの情報を基に，担任と保護者で相談し，まずは無理に学校に行かせようとせずに，長い目で取り組むことを確認した。

③　初期段階の対応考察「無理をさせずに長い目で見る」

Ａ児の不安を取り除くことができずに，不登校傾向がＡ児に出てきている。言葉に出てきた事案を解決しただけではＡ児の不安を解決したとは言えないと考えられる。しかし，今後の方針が決まったことで，Ａ児に登校刺激を送りさらなる苛立ちが溜まることがなかったと考えると，教育センターへ相談に行ったことは正解だったと考えられる。また，学校も保護者も無理に学校へ行かせず，長い目でＡ児に関わっていくことを確認できた事は，今後のＡ児への支援について有意義だった。

(2)　中期段階（３～５期）のＡ児の変容とＡ児への対応

①　３期のＡ児の状態「増大する苛立ちと不登校へ」

５月の連休明けからＡ児は，全欠状態となった。保護者とともに教育センターに通い，面接を受けていたが，日に日に苛立ちが大きくなり「イライラする。」や「道路に飛び出して死んでやる。」といった言葉を多々口にするようになっていった。教育センターの相談員にも暴言を言うようになり，「行きたくない。」と言って面接を拒むようになった。また私がお便りを持って家庭訪問に行っても，顔を見せることもなく部屋にこもったままだった。さらには，私の自動車のエンジン音やインターホンの音がなったりすると部屋のカーテンを閉めたり，部屋に閉じこもるようになっていった。母親の話では，家でも食欲がなくなり，夜も眠れない日が続いたという。言動が荒れたＡ児を保護者が心配し，医療機関を受診した結果アスペルガー症候群の診断を受けた。また医師や教育センター，保護者との情報交換からＡ児の不登

校は，「３年生になり，学級替えや担任変更，理科社会といった新しい教科の始まりから，今まで未経験なことが増え，全てが不安になってしまった」ことから生じたのではないかと考えられた。

②　３期のＡ児への対応「Ａ児が落ち着くことを最優先に考える」

教育センターの相談員との情報交換で担任がＡ児とどのように関わっているのかを話し，今後の対応を考えた。教育センターの相談員からは「Ａ児にとっては，他者と話をすることで不安を増大させてしまう状態である。ラポートが取れていない状態であるならば，家庭訪問もＡ児にとっては登校刺激になってしまう可能性がある。」と助言を受けた。今までの家庭訪問でのＡ児と担任の関わりを振り返るとお便りを届けたり，学校の行事の様子を少し話したりする程度でＡ児と活発に交流が取れていたわけではなかった。そこで，保護者と相談し，家庭訪問が刺激となり，不安を増大させるリスクを考えた結果，学校側からの家庭訪問はしばらく行わないことにした。また，医療機関への受診からＡ児は，変化を好まず，特定の人間関係の中で生活することが好きな一面があることが分かった。Ａ児の状態から，家族の中でゆっくりとコミュニケーションをとってもらうことを第一とし，家庭からの連絡以外はせずに学校からは連絡もしないこととした。しかし，Ａ児の暮らす地域には当然同じ学級の子どもたちも多々住んでいる。生活している中で子どもたちと出会うことは充分に考えられる。そこで私は担任として，学級の子どもたちにＡ児に会った時や見た時について次のような学級指導を行うこととした。まずＡ児の状態を「３年生になってからの様々な変化の中でＡ児は心と体のバランスを崩している。体は元気な時もあるかもしれないが，心の元気がなくて休んでいる。心の元気を今貯めている状態だから学校を休んでいる。」と説明した。次に，「元気が貯まるようにするために，挨拶をしたり，話しかけたりすることはよいが，欠席の理由を聞こうとしたり，ずる休みと決めつけるような発言はしない。」ことを指導した。この時期のＡ児にとっては，しっかりと心を休め，学校や級友からのプレッシャーがないように心掛けることが重要だと考えた。

③　４期のＡ児の状態「止まらない不安と家庭生活の乱れ」

６月中旬ごろから教育センターへはＡ児に家庭でどのように接していくかを相談するために，保護者のみが月１回程度行くようになった。受診している医師からも教育センターの相談員からも，「できるだけＡ児のしたいことをさせてあげて，両親に甘えてくる時には甘えさせてあげるのが良いのではないか。」と助言を受けた。Ａ児が元気そうな時に，外出をしたり，両親と公園で体を動かして遊んだりしてＡ児に自信をつけさせるように過ごしてもらった。しかし，天候や外出先の定休日等で予定が変更になると「いつも俺はこうなるんだ。駄目なんだ。」等の発言が出て，不機嫌になったり，自信を無くしたりすることが多々あった。また保護者からの連絡により，普段自分の部屋で過ごしている時は，時刻表を見ていることが多いことが分かった。食欲はまだあまりなく，就寝時間もまだ遅く寝不足の日が多く続いていた。自信を無くして調子が悪い日は，夜遅くに奇声を上げることもあったという。

④　４期のＡ児への対応「学校とのつながりを切らない」

家庭での様子を聞き学校では，Ａ児に負担をかけないようにするとともに，Ａ児と学校との関係を完全に切らないようにすることが大切だと考えた。今まで担任が届けていたお便りを，幼稚園から一緒だった幼馴染の子から届けてもらうようにしたり，学級は違っても仲がよい子からＡ児の調子のよい時に遊びに行ってみてもらったりした。Ａ児が学校に対して拒絶しているこの時期に教師がＡ児と関わりをもつことは，さらにＡ児の自信を失わせる恐れがあると考えた。

⑤　５期のＡ児の状態「落ち着き，そして学校へ」

夏休み明け頃から保護者から連絡があり，Ａ児の状態が落ち着いてきたと報告を受ける。「学校休んでいると暇だな。」や「僕もそろそろ学校に行った方がいいのかな。」，「学校では，みんなどんな風にしているのかな。」といった学校についての発言が家で出始めた。夏休み中は，仲の良い友達と，会話はほとんどないが楽しく遊んだり，祖父母の家に滞在し様々な所に出かけたりしたこともあったという。少しずつ登校刺激を行うことができるようになってきていると考えられる。

⑥　５期のＡ児への対応「信頼関係の構築」

まずＡ児への支援について，教育センターの相談員や医師から助言を受けた。医師からは，Ａ児について「対人関係の構築が苦手で，環境の変化を嫌うタイプ」との指摘もあり，「とにかく無理をさせない」と助言を受けた。そして教育センターの相談員との面接から，「Ａ児はプライドが高く，言われるがままに行動させると嫌悪感を抱く恐れがあるので，自己決定させることで自信をもたせるように支援をした方がよいのでは」と助言を受けた。具体的には，「最終判断はＡ児に任せること」や「初めはこちらから選択肢を出し，本人が選んだ選択肢を実践していくこと」，「選択肢には必ずＡ児が好きなことをする選択肢が含まれるように選択肢をつくること」が大切ではないかということを相談員と担任で確認した。次に校内対策委員会を開き，実際にどのような支援を行っていくかを決定した。まずはＡ児本人と関わり，担任が信頼関係をつくることが大切ということになった。家庭との連絡調整の基，毎週金曜日の放課後に家庭訪問を実施し，コミュニケーションをとることにした。

しかし，５月以降全く担任の私とは顔を合わせていないＡ児といきなりコミュニケーションをとることは難しい。そ

こで，初めはＡ児との距離を縮めるために，Ａ児に会えなくてもＡ児と繋がりができるようなプレゼントをすることにした。Ａ児が家で時刻表を見ていたことから鉄道好きであることが分かっていたため，図２のようなシートを家庭訪問時に作成し，「暇だったら見てみて，いらなかったら捨ててね。」と言って保護者からＡ児に渡してもらった。家庭訪問当初は顔を出さなかったＡ児だったが，徐々に玄関で顔を見せてくれるようになった。「越後線の駅の名前はもう全部言えるよ。」や「先生は美佐駅や土合駅は知ってる？この２つも地下にあるんだよ。」といった会話もできるようになっていった。また，Ａ児に選択肢を出す時には，「一緒に遊ぶ」や「先生とクイズ」といった簡単かつ負担にならないような選択肢も入れて家庭訪問を行った。落ち着きを見せ始め，徐々にコミュニケーションをとれるようになっているＡ児から，本人の気持ちに寄り添い少しずつ自己決定を通して自信をつけていくことが大切だと考えられる。

図２　家庭訪問時にＡ児に届けたシート（一部抜粋）

⑦　中期段階の対応考察「誰が，いつ，どのように支援するか」

苛立ちが増大し，暴言が飛び出したり，部屋に閉じこもっていたりしたＡ児の姿を見ると教師や学校が直接Ａ児と関わることはできなかった。しかしＡ児は時間をかけながらも，家族とのコミュニケーションを通して徐々に落ち着いていくようになっていった。そしてその後Ａ児は友達と遊んだり，学校のことを口に出したりするようになる。このことからこの段階での教師（学校）の支援は，級友への指導と保護者の精神的なケアが有効だと考えられる。Ａ児と級友，保護者と学校との繋がりが切れてしまえば，Ａ児が回復してもその後で級友と遊んだり，担任がＡ児との関わりをもとうとしたりする時にスムーズに行動できなくなるのではないだろうか。また医師や教育センターの相談員からの助言により，この段階で直接Ａ児と関わるのは保護者であり，学校は保護者との情報交換やＡ児が回復に向かった時のための準備をするという，家庭と学校の役割分担を明確にした。Ａ児の状態に合わせて，誰がどのようにＡ児に関わるかという役割分担が確実に行われたことがＡ児の回復に効果的だったと考えられる。さらにＡ児が落ち着いた後，担任がＡ児との大きなトラブルもなくコミュニケーションがとれるようになったことからも家庭，学校，医師や教育センターといった外部機関との繋がりがＡ児に合った対応をする上でとても重要だと言える。

(3)　後期段階（６～８期）のＡ児の変容とＡ児への対応

①　６期のＡ児の状態「登校意欲の上昇」

家庭訪問を繰り返しゲームや会話を通してコミュニケーションをとっていたが，Ａ児は徐々に学習の遅れを取り戻したいと考えるようになり，調子の良い時には漢字ドリルや計算ドリルをするようになっていった。学習の理解度は高く，国語や算数に関していえば，年度内にドリルを終えることはできそうだった。12月頃になると，Ａ児の母から「来年度には，下の子が１年生として小学校に入学します。そうすると登校班で学校に行くことになり，その時にＡ児が今のままでは，もっと学校に行きづらくなると思います。下の子の入学をきっかけに何とか学校にいけるようにしたいのです。」と相談を受けた。Ａ児もそのことに納得はしているが，友達や生活面で不安なことが多い状態だった。練習として，冬休みには絵の具道具などを取りに保護者と学校に来校し，誰もいない教室に入ったり，登校した時に入る部屋を確認したりしてみることにした。そしてＡ児の登校へ向け，学校の受け入れ態勢の整備が必要となった。

②　６期のＡ児への対応「登校するＡ児の受け入れ態勢を決める」

現在のＡ児の状態について医師からは「本人が納得しているのであれば登校させてもよいが，決して無理をさせないことが大切。」と助言を受けた。教育センターの相談員からは「登校の形態について本人の合意を得ることが大切。」と助言を受けた。その後校内委員会を開き，Ａ児が学校に安心して来ることができる状態にするために必要なことを話し合った。その結果次の３つのことを決めた。１つは学校環境である。まずは人目を気にしないでよい場所を設定し，学校に来ても心配ないと思える場所（個室）をつくることとした。また，読み物の本やゲームブックなどの本人がリラックスできる物もそこに準備することとした。２つ目は，担当する職員である。級外の職員から支援をしてもらうこととしＡ児は職員の手伝いをしたり，自習をしたりすることとした。また，１週間に１日は学校相談員の方と過ごし，学習の指導や相談を通してＡ児の状態を詳しく見取ることができるようにした。３つ目は支援方法である。変化を嫌う性格から，当日の予定や１週間の計画を作り，生活の流れを明確にすることとした（図３）。また，Ａ児の活動には選択肢から本人が選べるようにし，Ａ児と教師が一緒に活動を考えられるようにした（図４）。

家庭訪問は３月一杯まで続け，学校で決まったことをＡ児と確認したり，登校する時間や活動内容についてＡ児と話

し合ったりした。さらに，A児の学習面の不安解消のため訪問時に学習指導を行い，無理のない範囲で家庭学習を奨励した。

③　７期のＡ児の状態「無意識に苦手を避ける」

４月となり個室での短時間登校を開始，初日は欠席したが，入学式の日から登校班で登校した。以後１時間程度自習（読書やパズル等を含む）をして下校。全校朝会などの集会への参加は，覗くだけでもと勧めるが強く拒否した。人と関わる活動には壁を作っている。また休み明け等も休むことなく登校しており，本人は調子が良ければいる時間を２時間に延ばすことを考えるようになる。同世代の友達と同じように登校していることはうれしいようで，今後の事を話すと「いつになるかはわからないけど教室に戻りたい。」と答えるようになった。しかし，保護者や学校としては時間が長くなるだけで人との関わりが増えないことを心配し，A児と相談することとした。また登校すること自体には慣れてきても，A児本人からは他者との関わりを示す目標は出てこなかった。自身の苦手分野と向き合うための支援が必要となった。

④　７期のＡ児への対応「目標を定め，少しずつ確実に進む」

A児が登校するに際して，学校での受け入れ態勢を整えた後，学年でA児とどのように関われば良いか事前指導を行った。A児の母から学年の全員に向けて手紙を書いてもらい，学年朝会で紹介した。「元気が出るようにお出かけしたり，遊んだりしていた時もあること」や「外から見ると元気そうだが，実はそうではないこと」，「学校に行きたくても行けないことで自信を無くし悩んでいること」，「A児の元気が溜まり，自信を取り戻せるように静かに見守っていてほしいこと」を確認した。全員がA児の気持ちに寄り添い，全員で支援して行くことを確認することができた。

次に，A児の対人関係の構築について校内での適応対策委員会の後，保護者と相談し，A児に次の２つのことを提案した。１つ目は，「教室に戻るには友達との関係もとても大切なので，無理のない範囲で人と関わり，学校に来ている実感をもてるような活動を予定に入れる」こと。２つ目は，「人と関わる練習をするために発達障害通級教室に通ってみる」ことである。ここではA児に選択肢を出すのではなく，今まで頑張ったことを認めながらも教室に戻るための課題を確認しながら提案した。

具体的には，人と関わり，学校に来ている実感をもてるようにするために次の２つのことを行った。１つ目は，A児の今までの頑張りとこれからの目標を可視化し，今は何を頑張ればよいのかを明確にした。また，A児の皆と同じ活動をできるだけしたいという意思を生かし，国語の学習で行った「ドリームツリー」（図５）を活用し，できたことを葉っぱ型の付せんに書き，貼ることでできたことを増やしていった。初めは「保健室や図書室に行き，健康観察をしたり，本を借りたりする」や「日直からお便りを届けてもらう」，「水泳授業の欠席者と一緒に自習をする」といったことからスタートした。２つ目は，学校行事への参加である。無理のない行事の参加の仕方をA児と相談し，できるだけ行事に参加するように約束した。朝会では担任と一緒に，人目の少ない場所から様子を眺めることから始め，徐々に体育館の入り口で参加することができるようになっていった。また本人が拒絶していた６月下旬のマラソン大会では，当日は保護者の車内で皆が走る様子を見学し，休日に保護者とコースを走り，タイムをとってもらい，後日担任からおおよその順位を伝えるようにして参加することができた。その後の10月上旬の芸術祭では，発表参加はできなかったが，作品鑑賞を弟と保護者と共に教室を回り，大勢の中で過ごすことができた。行事に参加することで，徐々に自信がついてきたのか，普段からも清掃に参加したり，朝会に最後まで参加したりすることができるようになっていった。10月下旬の遠足には，全校児童と一緒に，縦割り班で最初から最後まで参加することができた。

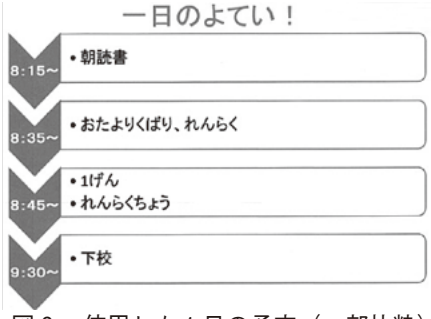

図３　使用した１日の予定（一部抜粋）

図４　時間割選択に使用したカード（一部）と実際にＡ児がたてた時間割

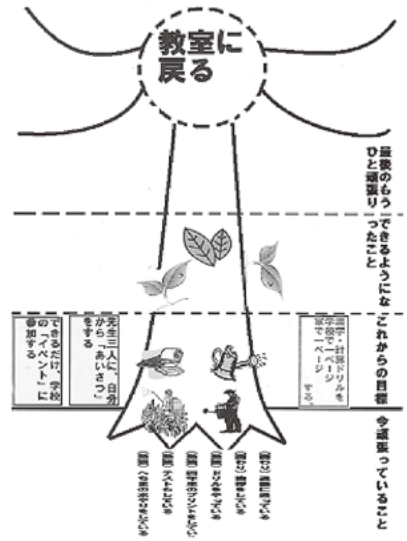

図５　長期的な目標と短期的な目標を可視化したドリームツリー（使用前）

⑤　8期のＡ児の状態「教室復帰に向けて」

通級指導や学校がたてた目標達成のための活動を通して，Ａ児は欠席することなく登校できるようになっていった。徐々に学校で過ごす時間も伸び，冬休み明けからは給食前まで学校で過ごすようになった。さらに個別の放課後学習を希望し，３月には学習の遅れは完全になくなり，テスト等も全て受け入れるようになった。給食を好きなだけで良いから食べてみる等の練習もするようになった。通級指導も３月で卒業し，Ａ児は来年度からは教室に戻ると張り切っていた。しかし，「集団での活動や授業の中では，参加できるものと自信のないものがまだある。」と通級指導の先生から報告を受けていた。保護者や担任，通級指導の先生と話し合いを行い，いきなり教室に戻るのではなく，いつでも安心できるいわゆる避難場所のような場所を用意して慣れさせていくことが必要となった。最終的にＡ児は，５学年進級時に特別支援学級へ転籍し，段階的に教室へ復帰，11月１日から通常学級に転籍し完全に教室復帰を成し遂げた。

⑥　8期のＡ児への対応「信頼に基づくＡ児への提案」

５年生の教室の隣が特別指導教室だったこともあり，まずは特別支援学級に入り様子を見ることを提案した。その際，交流学級として，ある程度本人の状態に合わせて５年生教室への入室を決められることや，学習は通常通り特別支援学級や５年生学級の担任がつき教えられることを保護者やＡ児本人に説明し，納得してもらった。

⑦　後期段階の対応考察「選択ではなく挑戦へ」

登校意欲が高まっていく後期，Ａ児は学校にいる時間を伸ばしていくことで教室復帰を目指すように考えるようになっていった。しかし学校は，人との関わりを増やしていくことがＡ児にとって重要だと考えた。それは，これまでの医師や教育センターの相談員との情報交換により，Ａ児の不登校が，「対人関係スキルの不足からの環境への不適応」であるということが分かっていたからである。Ａ児への自己決定だけでは，不登校は完全に解消できない。Ａ児の不登校解消には，Ａ児自身が苦手に立ち向かう意志が必要だった。その意志をもたせることができるのは，登校意欲が高まっており，担任，保護者がＡ児と信頼関係ができていた後期段階しかなかったと考えている。Ａ児本人が納得でき，保護者，担任等の指導者と共に学校生活に参加し続けたことがＡ児が学校行事に慣れていくことができた要因ではないだろうか。

表１　３年生時のＡ児の学校との関わり

３年生時	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
欠席の様子	登校渋り	全欠	全欠	全欠	全欠	全欠	全欠	全欠	全欠	全欠	全欠	全欠
家庭訪問（交流）							週１日	週１日	週１日			
家庭訪問（学習支援）									週１日	週１日	週１日	週１日

表２　４年生時のＡ児の学校との関わり

４年生時	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
１時間登校	12	13	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
２時間登校	0	6	21	15	5	19	19	19	0	0	0	0
３時間以上登校	0	0	0	0	0	0	1	2	15	17	19	15
通級指導	×	×	×	週１日	×	週1～2日	週２日	週２日	週２日	週２日	週２日	週２日
家庭訪問（学習支援）							週１日	週１日	週１日	週１日	週１日	週１日
欠席	2	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0

５　研究のまとめ（教師の行動と支援体制の在り方）

「不登校の回復の過程」を通してＡ児への支援を行うことで，Ａ児が無理をすることなく不登校を解消することができた。（表１，２）また，Ａ児が不登校から教室復帰を果たすまでを段階毎に丁寧に支援することができた。登校刺激を送るタイミングや登校日数の変化から，Ａ児が各段階で，後退せずにスムーズに回復していったことが分かる。これはＡ児の状態を正確に見取り，適切な支援ができたことを示していると考えている。学校や家庭で見られる状況と相談員の見立てや医師の診断をすり合わせ，Ａ児に合った支援を行った成果だと言える。

最後に本研究を振り返ると，教育センターや医師といった専門機関とつながることは，的確なタイミングで適切な支援を行う上で非常に有効であると考えられる。専門機関からの適切な助言を基に，保護者と学校が密に情報交換を行い，協力することで適切な支援が行うことができる。専門機関の児童の状態への的確な診断に基づく助言と学校と保護者の適切な支援が不登校児童には必要なのである。

引用・参考文献

注[1] 池島徳大　「不登校問題の理解と支援」奈良県立教育研究所研究紀要，2001年
・高橋雅彦，「不登校児童を継続的に登校させるための取組－メンタルフレンド的な視点に基づく関わり方とルール・体制づくりを軸にした実践を通して－」，教育実践研究第19集，2009年
・森　智史，「不登校解消を実現するための支援の研究－自己理解を促し，目標設定と自己決定を軸にした実践を通して－」，教育実践研究第26集，2016年